

## 【熊本S. J. C. D. 例会 抄録】

演 題 咬合器による下顎機能運動の再現性について考える

演者名 渡辺裕士

日 付 2008年5月27日

keywords

1. 補綴治療
2. 下顎機能運動
3. ポッセルト フィギュア
4. 咬合器のハンドリング

### 抄 録

私が技工士として初めて咬合器を手にしてから、早30年が過ぎようとしております。日々の臨床に追われながらも、P. K. トーマス先生の「ナソロジカル・オクルージョン」を傍らに、コーンテクニックにあこがれ練習した日々が、懐かしく思い出されます。当時の私にとっては、咬合器上の咬合面が「咬合」そのものでした。

患者さん固有の下顎機能運動を再現・回復することが、補綴治療の機能的な目標と言えるかと思いますが、近年、ME 機器等のめざましい進歩により、“生理咬合” “チュウイング” が取り沙汰され、同時に、咬合器に対しては、“非生理的” “直線的な動きしかできない” といった評価が多くなったように感じられます。

しかし、補綴治療に咬合器が欠かせない事は言うまでもなく、咬合器の理解と操作法に、補綴治療成功への鍵の一つが託されていると考えます。

今回は、私の咬合器ハンドリングと、そこに至った経緯を紹介させて頂き、先生方のご意見・ご批判を賜りたいと思います。